

改訂された日本飼養標準肉用牛（2008年版）

「日本飼養標準」肉用牛は、肉用牛に関する試験研究の成果に基づいて1970年に初版を作成し、その後4回にわたり改訂されてきました。2000年の改訂以降における育種改良に伴う優良品種・系統の普及、飼養管理技術の進歩、肉質に関する研究の進展、環境問題、飼料を取り巻く情勢の変化等により第五次改訂が検討されていました。学識経験の豊富な方々の協力もあって、「日本飼養標準・肉用牛(2008年版)」が完成して2009年3月に中央畜産会から出版されました。

☆ 技術の内容

1. 大型化へ対応する要求量

近年大型化している肥育牛に対応した要求量を示してほしいという生産者の要望に応じて、算出式を見直すことによって、肉用種去勢牛では体重800kgまで対応できるようになりました。

2. 蛋白質要求量

蛋白質を表示する単位として、これまで粗蛋白質(CP)と可消化粗蛋白質(DCP)が使用されてきました。本飼養標準では、これまでの飼養標準で採用されてきた算定式をできる限り使いつつ、代謝蛋白質(MP)システムを基礎に最終的にCP要求量を算定するように変更しました。

3. ビタミンA要求量

ビタミンAの要求量は、1995年版から体重1kgあたり66IU(国際単位)から42.4IUに減少されました。しかし、増体日量(GD)が1.0kg以上の場合、42.4IUでは血漿中のビタミンA濃度が低下していくことが明らかになりましたので、DGが1kg以下では変更がなく42.4IUですが、DGがそれより大きい場合には66IUに増加しています。

4. 解説事項の充実

自給飼料多給を基本とする効率的な家畜生産に向けた対応として、放牧の利用促進、稲発酵粗飼料等自給飼料や製造副産物の飼料特性と利用法について解説しています。肉質に関しては2008年から導入された小ざし部分を考慮した脂肪交雑基準について紹介しており、また格付けに反映されないが、おいしさや安心感の醸成にかかわる項目について解説しています。

5. 利用しやすくなる2008年版

内容の記述は、肉用牛関係者が利用しやすいように工夫していますが、さらに、①飼料設計診断プログラムにおいて使用できる飼料数を5種類から10種類に増加している、②360以上のキーワードで索引機能を強化している等2000年版より便利になっています。

☆ 活用面の留意点

詳細は中央畜産会(03-6206-0846)または畜産草地研究所畜産研究支援センター大家畜飼養技術開発室(改訂事務局029-838-8658)にお問い合わせください。

(畜産草地研究所 畜産研究支援センター 大家畜飼養技術開発室 室長 甫立 京子)

